



カメラマン物語

第2話 竜次 集合写真を撮る

竜次 集合写真を撮る

近くの山の登山道で、偶然出会った猪を撮影し、その写真が新聞に載った竜次は、有頂天だった。

写真・結城竜次カメラマンというクレジットが記載されている紙面を見る度に、何とも言えない高揚した気分になった。

「俺は勝ち組だ。今まで眠っていた才能がやっと発揮されたのだ。
ざまーみろ。

中学生時代俺をみそっかす扱いした先生達よ。

俺の本当の姿はこれなんだ。

高校時代、決死の思いで告白したのに、鼻で笑った百合子よ。

後悔したろう。

残念だったな。

「今の俺は、次元が違う存在になったんだ。

その内、雑誌やマスコミの人たちが俺の才能に注目して、一気にスターダムにのし上がるだろう。むふっ」

朝、布団の中でぶつぶつ言いながら、今の幸せ感をしっかり味わっていた。

「カメラマン」という響きが、こんなに気持ちいいものかと思った。

しかし実際には、名前が載っただけなので町を歩いても、誰も気づきはしない。当たり前だ。

しかし、単純な竜次にしてみれば、皆が自分を注目しているように思えるのだった。

家を出る時にサングラスをかけようかと本気で考えた。

竜次は、もともとだらしない顔なのだが、得意満面の、口が開きっぱなしの超締まりの無い顔をしていた。

大学の写真部の部室に行くと、壁にあのイノシシの写真の載った新聞が張り出してあった。

同輩の吉原が、竜次の名前が新聞に載った事を知っていたのだ。

吉原が、竜次に戯けて「よっ、カメラマン！」と声をかける。

「やめろよ」

竜次は照れた。

そう言いながらも、満更ではない。

吉原は続ける。

「ラッキーだったよな」

「まあな」

「これで大学時代のいい思い出が出来たな」

吉原の言い方には何処か棘がある。

「そうだな、プロとしての、いいスタートになったよ」

「えっ、お前がプロカメラマンを目指すのかよ」

吉原は大げさに驚く。

「ああそうさ」

「そりゃ大変だ。言うことないな。ほな、がんばりや」

何処の方言かわからないような口ぶりで、そう言うとさっさと部屋を出て行った。

明らかに呆れているのだ。

吉原は写真部員だが、写真撮影に関して、あんまり熱心ではなかった。

いや、この写真部員全体が、趣味として写真と付き合っているだけだった。

まだフィルム時代は、白黒フィルムの現像や、暗室などがあったので、まだ職人的な雰囲気や作業があった。

しかし、デジタル時代になった今、パソコンで写真データをいじり回すだけの集まりになったところも多い。

運動クラブのように、見た目の上手下手が見えにくい分、なんとも緩い。中にはまともなカメラさえ持っていない部員もいる。

しかし、最近女子カメラなんていうのも流行り、部員はそこそこいる。パソコンで画像をいじったりする、写真のデザイン化なんていうのも出てきている。

いろいろ見た目は変わってきているが、サロン化してきただけで、趣味に毛が生えた程度である事は間違いない。

当然、将来プロカメラマンなどなる気の連中はいなかった。

それよりも、大学卒業後、一流の会社に入る事が目標だ。

そして、それは当たり前だ。

本当にプロになりたかったら、高校を卒業してすぐ、スタジオやプロカメラマンのアシスタントになった方が近道である。

大学生写真部の正統派吉原は成績もいい。

そして努力家である。

自分の写真をアートだといわない謙虚さもいい。

それだけに観察眼も正確だ。

写真が好きだけあって、有名なカメラマンの作品も結構見ている。

そんな吉原から見た竜次の写真の力は、たいした事はなかった。

そしてそれは正しかった。

調子に乗ってる竜次は、「猪写真」が話題になっている内に、美穂ちゃんとデートしようと思って連絡をした。

昼休みまでに何度もメールをして、やっと美穂から電話が来た。

「今度の日曜日、お母さんの試合があるので応援に行くの。ついてくる？」

美穂のお母さんは、地区のママさんバレーのキャプテンらしい

「行くよ、行くよ」

「ちょうどいいわ、お母さん達の集合写真も撮って。私のカメラ、今調整中なの」

「了解。名カメラマンに任しとけて」

「まぐれの写真が新聞に載ったくらいで、調子づかないですよ。時間は後でメールするわ」
そう言って電話を切った。

竜次は「初デート」のつもりで得意絶頂だ。

その週の日曜日、美穂と駅で待ち合わせる。

美穂はジーンズとブラウスだけの軽快な装いだが、アイドル並みの可愛さオーラを振りまいている。

美穂と一緒に体育館へ行くと、美穂のママがちょうどミーティングが終わったらしく、体育館の入り口にいた。

美穂によく似た、目のぼつちりとした美人のお母さんだった。

「あなたが、新聞に載ってたカメラマンね。すごいわね。今度決勝戦なので、試合に勝ったらみんなの写真も撮って」

カメラマンという言葉が心地良い。

「いいですよ」

美穂が説明する。

「みんなの記念写真は、大会主催者の人が頼んだ写真屋さんが撮るらしいの。その後で撮ってね」

「写真屋さんがいるの。それだったら、僕が撮らなくてもいいんじゃない」

「あのね。写真屋さんの写真は結構高いのよ。みんなお母さんだから、値段には敏感なの。だから竜次君の写真をプリントして配る予定よ」

「なるほどね。わかった」

竜次は納得した。

試合は白熱していた。そして美穂ママの活躍で優勝したらしい。

表彰式の後、おきまりの写真撮影が済んで、みんながそろそろとやって来た。

「おめでとう、ママやったわね」

美穂ママの顔はうれしさに上気している。

「記念すべき試合だったわ。あー竜次さん。写真を撮って」

「わかりました」

竜次はチームのみんなに声をかける。

「みなさーん。写真を撮りましょう」

ばらばらになりそうだったみんなが集まって塊になった。

「家族の方も来てよよ。みんなおいで」

美穂ママの一声で、人は30名ほどにふくれあがっていた。

バレーボールのママ達は撮りなれているらしく、前列は座り後ろはたって構えている。その回りに子供達やパパが囲んでいる。

カメラを準備している竜次に美穂が近づいてきた。数が思ったより増えたので少し心配になったのだ。

美穂は竜次にささやいた。

「フラッシュ持ってきてるでしょ。早く準備して」

「フラッシュ？ フラッシュなんか持ってないよ。大丈夫だよ、ここは明るいし」

美穂はびっくりした。

「大丈夫？ 竜次は集合写真撮った事があるの？」

「集合写真たって、スナップ写真と同じじゃないか」

「大会が終わったから、会場のライトはさっきより暗くなってるのよ。それにここは窓が多く逆光だし。水銀灯のライトは色温度が・・・」

思いがけない美穂の心配そうな話しぶりが、竜次を慌てさせた。さらに色温度なんて聞いたこともなかった。竜次はカメラのことなど何にも知らないのだ。

「急に色んなこと言わないでよ。大丈夫さ。シャッター押すだけじゃないか」

「竜次、あんた何にも知らないのね」

美穂は明らかに失望している。

そんな時向こうから声が聞こえた。

「美穂さーん。友達が探しているわよ」

「あー知夏だわ。今行くわ。頼むから竜次、ちゃんと撮ってよ」

竜次を睨むと、そう言い残して、走り去っていった。

「フラッシュなんて使った事がないよ。第一持ってないし。体育館は明るいし、何の問題も無いよ」

竜次はぶつぶつ言っている。

「カメラマンさん。写真をお願いしまーす」

竜次はその声で我に返った。

ふと顔を上げると30名くらいの人たちが竜次を見ていた。

竜次は、その瞬間上がってしまった。

60個の目が自分を見ているのだ。

大体、そんなに肝の太くない竜次だ。みんなの目線を浴びたことで、緊張してしまったのだ。

冷や汗が出た。

カメラの設定をする振りをして時間をかせぐ。大きく深呼吸して平静を装った。

「いきますよ。はいチーズ」

チーズをバターと言い換えればよかったかな、とちよっと思った。

「パシャ」

「はいOKです」

声が裏返っている。

「えー」

みんなから心配そうな声が出た。

「一枚だけで大丈夫？ 写真屋さんは必ず3枚撮るけど」

竜次は慌てて、カメラの液晶モニターを見た。ちゃんと写っている。

安心した。

「大丈夫。写ってますよ。名カメラマンは一撃必殺です」

訳のわからないことを言うと、みんながどっと笑った。

受けたので竜次は気を取り直した。

「写真は美穂ちゃんのお母さんの所へ、持って行きますよ。待ってて下さい」

「有り難うございまーす」

みんなはちりぢりに去って行った。

竜次は妙な高揚感を味わっていた。

「シャッターを押しただけなのに、こんなに喜んでもらえるなんて。カメラマンって、やっぱり良いなー」

今まで、写真を撮ってお礼など言われたことがなかった竜次なので、みんなの笑顔が新鮮な感動だった。

その日の内に、竜次はパソコンに撮影データを取り込んだ。

カメラ側の写真サイズの設定は、Sサイズだ。

竜次はコンパクトフラッシュの500メガを1枚しか持っていない。

大きいサイズだとすぐに入らなくなってしまう。写真部仲間に相談すると、それ以外にもいろいろ自慢げに教えられるので、聞きたくなかった。そこでパソコンの得意なおとなしい友達に聞いて教えてもらった。

写真部の奴らは、マニアックな奴が多くて、自分の機材ややり方を得意げに話したがる奴が多い。だから、何にも知らない竜次が、写真部仲間にカメラについて尋ねると、1時間くらい離してくれないのだ。

パソコンは父が昔買っていたのを貰って使っている。

画像加工ソフトは、プリンターを買ったときおまけについていたフォトショップの機能限定版だ。

写真データを加工するにはフォトショップが一番良いというのを誰かが言っていたので使っているだけだ。

色んな機能があるみたいだが、明るさの調節する機能以外は、一度も使ったことがなかった。

竜次はモニターに顔を近づける。

楽しそうなみんなの顔が写っている。

「うん。問題ない」

竜次はみんなの喜ぶ顔が目に見えた。だらしない顔が、またもや超だらしない顔になって

いた。

「カメラマンてちょろいな」

竜次は大きく頷いた。

約束の日に美穂ちゃんの家に行った。

小さいけど、お洒落な家だった。玄関の僅かな階段の隅には鉢植えの綺麗な花が置かれている。

ピンポン

「竜次です。写真を持ってきました」

「はい」

中から美穂ママの声が出た。

居間に入って行くと、チームの仲間が集まっていた。

写真が出来たって聞いたので、チームのママさん達を集めていたのだ。

竜次は、美穂ママに、プリントしたA4の半分の大きさの写真を手渡した。

「有り難うね」

みんながその写真取り囲んだ。

みんな黙っている。

その内一人のママがぼそりと言った。

「なんか暗いわね」

もう一人のママも呟く。

「この写真、斜めなんじゃない」

「少しぶれてるわ」

「プリントが合っていないんじゃない」

「えー、変な顔で写っている」

「後ろの人の顔が見えてないわ」

「きゃー、美穂ママの目が半開きで変よ」

「私も目をつぶっている」

ママさんのひとりが口をとんがらせた。

「写真屋さんが持ってきた写真を見て」

大会主催者が各チームの集合写真を、写真屋さんに撮らしていた。

注文販売と言うことで六つ切りのサイズの見本写真が、チームの責任者に送られていたのだ。

注文袋には1枚3千円と書かれていた。スポーツ大会ではよくある奴だ。

3千円がすべて写真屋に入るわけではない。売り上げの何十パーセントは大会の利益になる仕組みだ。

そんな内訳は知らされていないので、写真屋の写真は値段が高いと評判が悪い。

見本写真は、みんな顔が見えて、はっきり写っていた。下に文字が入っていてちゃんとした記念写真だった。

それに比べて竜次の写真は、体育館の水銀灯がもろに反映していて、全体が緑色になっている

。

写真も小さいし、トリミングも雑。

真ん中の人だけがかろうじてピントが合っている。

顔の見えていない人も多く、よく見ると写真自体がぶれている。

ママさん達の冷たい視線が竜次を串刺しにしている。

そこへ美穂がやって来た。

「竜次の写真どうだった？」

美穂はみんなの雰囲気を感じて、竜次の写真を見た。

じっと見て、竜次の顔を見つめた。

「所詮、素人よね」

美穂の目が三角になっている。

「だから言ったでしょ。フラッシュ無しではこんな写真になるのは当たり前じゃないの。このど素人。バカみたい」

声は可愛いのに、内容は最悪だ。

がーん、素人・素人・素人・・・その言葉が頭の中を駆け巡った。

そして竜次は目の前が真っ暗になった。

ぽきっと、どこからか音が聞こえてきた。

天狗の鼻がへし折れた瞬間だった。

場所はやっこさん。

日景は、相変わらずお湯割りをのんでいる。

肴はあらかぶの唐揚げだ。

「小ぶりだけど、綺麗なあらかぶだったよ」

「見かけは悪いけど、あらかぶは、おいしいな」

そんな会話の横で、竜次は黙り込んでいた。

ビールも一口飲んだだけだった。

日景は知らん顔をしている。

「若いの。落ち込んでるね」

二人の変な雰囲気を見かねて、大将が話しかけた。

「はい・・・」

竜次はうつむいたままで呟いた。

日景は、やっと竜次の方を向いて話し始めた。

「話しは大体わかった。しかし素人と言われて落ち込んでいる訳がわからないな。竜次は素人なんだから」

竜次は益々うなだれた。

「竜次。猪写真が新聞に載って気分よかったろう」

「はい」

「それでいいじゃないか」

「ただ、美穂ちゃんから、ど素人と言われたのが・・・」

日景はくいと焼酎のお湯割りを飲み干した。

「問題はそこじゃない。ちゃんと写真が撮れなかったことが問題なんだろう」

大将も奥で頷いている。

日景は冷静だ。

「カメラマンの仕事ってのはシャッターを押すだけじゃないんだ。知識と経験と技が必要なんだ。どうせ竜次のことだから、カメラマンていうのは楽勝な仕事だと頭から信じていたんだと思う」

「そんな事はありません。僕は真剣にシャッターを切りました」

「ふーん」

「なぜ、フラッシュを使わないかとなじられましたか、僕は外付けのフラッシュは持っていません。だからしょうがないんです」

「そんな僕に写真を頼んだ方が悪いということか」

「・・・はい」

「フラッシュは買わないのか」

「はい。お金がないんです」

「バイトすれば」

「僕は意外と忙しいので、今は無理です」

「わかった、わかった」

日景は一息つく。

竜次は顔を上げた。

「僕はお金がありません。知識もありません。だけど、今持って入る機材で、一生懸命撮りました。それを 評価されなくてショックなんです」

「うん、そうだな。一生懸命っていえば、すべて許されるからな」

「一生懸命は一生懸命です」

竜次が口答えをする。

「竜次、一生懸命なのはみんな同じだ。お前だけが一生懸命なんじゃない。そんな言葉が通用するのは、高校生と素人だけだ」

「先生も僕をしろとうと扱いするんですね」

「ああ、プロとは呼べないからな」

竜次は、又黙り込んだ。

日景は厨房の大將に頼む。

「手羽先を2本焼いてくれ」

「あいよ」

「美貴ちゃん。お湯割り」

「はい」

竜次がぼそりと言う。

「先生、やっぱりフラッシュは必要なのでしょうか」

「ああ、フラッシュというのは、職業カメラマンにとって大切なんだ」

竜次は日景の真剣さが伝わって顔を上げた。

「各フラッシュには光の量が決まっている。ガイドナンバーと言って、距離によって絞りを決める。集合写真っていうのは、みんなの顔がはっきり写った方がいいよな。35ミリカメラだったら、絞りF5.6位でいいんだが、出来れば8ぐらい欲しい」

「絞りって自分で決めるもんですか」

「そうだ。絞りでピンとの深さが決まる。町の写真屋さんにしても、ファッションカメラマンにしても、ライティングは、重要な技術だ」

竜次は黙り込んだ。

なんだか難しいことをいわれているような気がするのだ。

竜次は、説明書が大嫌いである。

だから、触って色々動かしている内に何となく出来るようになる物を好む。

パソコンだって、アプリケーションだってさわっておぼえてきた。

今更、写真撮影についての勉強なんかまっぴらなのだ。

「だけど先生。前に写真というのは、その場所の光で撮るのが自然だと言ったでしょう。僕の撮った写真はシャッターを押したんですけど、誰が撮ってもあういう風に写るんじゃないですか。ぶれていても楽しそうに写っていると思いました」

「そんな写真をみんなは期待したろうか」

「さー、分りません。だけど俺に撮れって言われたので、俺風に撮っただけです」

「俺風ってなんだ？ 設定はカメラ任せで、ただシャッターを押しただけだろう」

日景の声がだんだん先生の声になっていく。

日景にしてみれば竜次は、写真論を戦わせる相手ではない。

「確かにシャッターを押したのですが、自然な写真という意味です」

「なるほど。そういう意味か。自然に見えるなんて、なんて不自然なんだろうという歌があった。吉田拓郎の歌の歌詞なんだけど、自然に見せるというのは大変な事なんだ。そもそも、自然って何だろうな」

「自然は自然です。ありのままの姿です」

「そうだな。しかし写真というのは自然を撮れるのかな」

日景の写真授業に竜次は乗っかっている。

竜次は気づいていないが、写真論の根本についての授業を日景はしている。

竜次は何を言っているのかと日景と向き合う。

「だってシャッターを押せば、勝手に写ってますよ。夕日も山も人も、みんな自然じゃないですか」

「そうだ。目に映る物はすべて自然と言えるだろう。風や臭い、温度、生き物たち、それらも自然だ。見えるものだけではなく、その場の雰囲気すべてがそこにあるから、成り立っている」

「はあ」

「写真は、そんな複雑な情報は記録できない。それでも、自然がそのまま写っていると言えるのだろうか」

日景の声は、低いがしっかりとしゃべる。

竜次は、その質問の意味が分った。

「確かにそうですが・・・」

「写真ってのは、そんな自然の一部を、撮影者の偏見で見ているだけなんだよ。写真は事実だけど真実ではないんだ」

「偏見ってなんですか」

「偏った見方ということだ。竜次が撮った写真は、すべて竜次という人間が見た、偏見の産物だと言うことだ」

竜次は黙っている。だんだん日景の言うことが分らなくなってきたのだ。

竜次は、理屈っぽい議論は得意ではない。

だいたいそんな「偏見」っていう事も考えたことがない。ただシャッターを押してるだけだ。そしたら写っている。それだけなのだ。

日景は竜次の反応で、竜次が理解不能の状態に陥っているのを感じた。話の内容をここで変えようと思った。

「竜次、写真は好きか」

竜次は、はっとした。

「好きです」

「どんなところが好きなんだ」

「良い写真が撮れるとみんなが喜んでくれるからです」

「そうだな。人に見せて喜ばれるのは嬉しいもんだ。今回の集合写真も、喜んでもらえると思ったのに、馬鹿にされた」

「そうです」

竜次は、つい目が潤んでしまった。

天使のような美穂ちゃんの目が三角になったのが頭にこびりついている。

良かれと思って撮影したのに・・・

そんな思いがなんか悲しくなったのだ。

「わかった、わかった。泣くことはないだろう」

「泣いてなんかいません」

「今回は、やはりストロボを使うべきだったな」

「僕、ストロボは持っていません」

「そうだな。お前の持って入るカメラにも、小さなストロボがついているだろう。それをだすだけでもよかったかも知れん。まー大人数を撮るには向いていないな」

「先生。カメラマンって、ストロボを持たなくては駄目なんですか」

「持たなくても良いが、どんなカメラマンって事が分かれ道だ」

「どんなカメラマン？」

「写真を撮ってお金を稼ぐカメラマンと、そうでないカメラマンのことだ」

「プロとアマということですか」

「あーそうだ。写真は知っての通り色々なパターンがある。人物を撮る、動物を撮る、建物を撮る、景色を撮る、スポーツを撮る」

「確かにそうですが、シャッターを押すことは変らないですよ」

「シャッターを押すことだけが、カメラマンの仕事ではないよ」

竜次はその言葉に面食らっている。竜次にはシャッターを押すことしか出来ないからだ。

実は竜次の落ち込みはここにあった。

竜次は劣等生でもなく、落ちこぼれでもない。

だけど、これといった特技もなく、漫画や音楽が好きだけの普通すぎる生年だった。

勉強も苦手で、何時だって中の下。大学だってみんなが行くから行っているだけだ。

ここの私立大学は入学金や授業料が高い。それは偏差値の低い連中を受け入れてくれる代償だ。

両親にも悪いと思っているが、自分でバイトして、学費の足しにしようという心もない。

そんな竜次に一筋の光を当てたのがカメラだった。

そんなに写真が好きではなかったが、シャッターを押すだけで、みんなと同じ物ができる。うまい下手なんて誰も分っていない。突っ込まれたら、自分の感性だと言えば、黙っててくれる。

努力しなくても、もしかしたら成功するかも知れない。そんな予感がしていたのだ。

黙り込んでしまった竜次に、大将が声をかけた。

「兄ちゃん、あらかぶの唐揚げ食べるかい」

「ああ、いただきます」

竜次は我に返った。

「兄ちゃん、あらかぶって嫌いかい」

「いいえ、そんな事はないですけど、家でも母さんは作らないから」

「そうかい、最近魚は人気ないからな。あらかぶってのは美味しい。アラカブには、諺があるんだよ。『磯のカサゴは口ばかり』ってことわざだ。カサゴは口が大きく、身体が小さい。食べる部分が少ないことから、「口先ばかりで実行力のないことの奴をいうんだ」

「口ばかりですか」

竜次はしゅんとなった。

職業カメラマンになるには、当然知識と経験が必要だろう。

それは分っているつもりだけれど、今の竜次にはピンとこないのだ。

「ライティングがプロとアマの線引きだろうな。職業カメラマンってシャッターを押すだけが仕事ではないんだ。セッティングを指揮するのも大事な仕事なんだ。

例えば、集合写真の場合、大人数だったらひな壇を用意するのも、写真屋の仕事だ。

ちゃんと綺麗に並べて、みんなの顔がはっきり見えるように並べる。並べ方も高さをなるべく揃えて、あんまりデコボコにならないようにする。ネクタイが曲がっていないか、襟が曲がっていないかのチェックも写真屋の仕事だ。

そして、目つぶりが無いようにするのも大切だ。

人間は一分間で、大人では男が20回、女が15回くらい瞬きをするんだ。その早さは1/125秒くらいと言われている。当然人間の数が多いと、誰かが必ずする。その為に何枚か撮らなくちゃ駄目なんだ」

「えー、そんなところまで写真屋の責任ですか。雛段で、あんなものまで用意するんなんて出来ないですよ」

「そうだな。写真を撮影してお金をもらうのは、やっぱり大変なんだ」

「あと、大きなストロボがいるな。カメラに取り付けて使うクリップオンストロボだと、光が足りないんだ」

「道具がいっぱい入りますね。大きいストロボだと値段が高いんでしょう」

「いいのは高いな」

「僕はそんな道具を使いたくないですよ。自然が一番なんでしょう。そんな不自然な写真は撮りたくないんです」

竜次は自然という言葉が気に入っている。

それさえ言えば、自分が傷つかなくて済むことをよく知っているからだ。

「まーいい。俺が言いたいのは、お金を払ってもらえる写真を撮るのは大変だって言う事だ」

「わかりました。しかし、僕は自分の感性でシャッターを押した写真が好きなんです」

「わかった、わかった」

日景はくいと焼酎を飲む。

「先生。有り難うございました。もう帰ります」

そう言うと残ったビールを飲み干して、店を出て行った。

「先生よ。もっと教えてやった方がいいんじゃないかい」

大将がカウンターの奥から顔を出して呟く。

「まー、本人が頼んできたらね。今のあいつにやわかんないと思うよ」

「そうだな。お金をもらってこそプロって事は、いつかわかるだろうな」

「俺もそうだったよ。みんな同じさ」

日景は昔をおもいだした。

学生時代、カメラを持って旅をしていた。

あちこちを回った。

結局、ろくな写真は撮れてなかったが、一番楽しかったような気がしている。

「大将、俺は竜次の気持ちがわかるんだよ」

日景は、そう言うと焼酎を飲み干した。

写真が好きになっていった過程も、写真撮影を職業にしようと思ったのも、自分に劇的な変化があったわけではない。

何かにぶちあたりながら今の自分が出来上がったのだ。

「俺もそうだったから」

誰にも聞こえない声で、ぼそりと日景はつぶやいた。